

「^①違う意見のひとと話せない」という声をよくきく。つい最近でも「違うということが、本当に耐えがたい」と身もだえするひとに出会った。どの声も、決して軽視することができない切実さを持っている。

たとえばわたしはセロリが好きだが、あなたは好きではないということがある。わたしはセロリのおいしさを主張できるが、あなたはまるでプラスチックを食べているみたいだと言う。どこかの歌詞にもある、ありふれた話だ。

こうした「違い」は痛みとしては表れない。むしろ「面白さ」として表現されることさえある。一緒に食べた夕飯にセロリが出てくれば、わたしがあなたのセロリをもらえばいい。幸福な贈与さえ起こる。

だがひとびとの口からこぼれ出る「違う意見」とはそうではない。多くの場合、政治的な立場や道徳的な考えについてだ。そして、その痛みはわたしもよくわかる。自分にとって大事なもののほど、異なるものは苦



左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部①とは何についての意見ですか。本文中から13字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

			～			
--	--	--	---	--	--	--

2 傍線部②の比喻は、本文中のどの部分の比喻ですか。35字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

			～			
--	--	--	---	--	--	--

3 「違う意見のひとと話せない」ではなく、どうすべきだと言っていますか。本文中から11字で抜き出しましょう。

話し、きいてみないとわからない

ゆらめく意見



ながい・れい 1991年東京都生まれ。2024年「水中の哲学者たち」で「わたくし、つまりNobody賞」を受賞。他の著書に「さみしくてごめん」など。

しい。

しかしあえて立ち止まってみる。「違う意見」とは一体なんなのか。それはどこからが「違う」と言えるのか。むしろ「同じ」意見とは一体なんのことなのか。

わたしたちは誰ひとりとして同じではない。だから、同じ意見だと思っただとしても、必ずどこか違いがある。それなのに、そこはあまり問題にならない。わたしたちはもっと、もっと、もっと、互いの声をききあうべきなのではないか。同じだと思っただとしても、違う。違うと思っただとしても、どこかで重なってしまう。そういうことが、対話では起こる。予期せぬ出会い

（作家、哲学者・永井玲衣、イラストはk o j i）

きいてみないとわからない。どんなことだってそうだ。あるいは、語りだしてみないと、自分でもわからない。言葉にしてみても、そうか自分はこんなことを考えていたのか、と思うことがある。それに、よく考えてみれば当たり前なことだが、「意見」は石像のように動かないものではなく、^②つねにどこかしらがゆらめくと動いている。

話してみないとわからない。きいてみないとわからない。本当にそうかわからない。わからなさを受けると、そこから対話が始まる。

だ。

NIEワークシートのこたえ（2025年10月28日公開）

◆ワークシート「違うとは何か(国語)」
2025.10.23付 夕刊 3面 解答

- 1 政治的 ～ な考え
- 2 同じだ ～ しまう
- 3 互いの声をききあうべき